

まど×キュア

～願いと希望のスマイル☆マジカ～

衛地朱丸

表紙／あきつきさや

極東燃萌帝國

まど×キュア

～願いと希望のスマイル☆マギカ～

目次

序章第一節

まどかのいない世界 5 P

序章第二節

魔法少女の物語 8 P

第一章

笑顔を忘れた転校生 24 P

第二章

メルヘンランドの秘密 49 P

第三章

交差と暗躍 58 P

第四章

深まる絆 87 P

第五章

魔女復活 109 P

第六章

集いし二つの力 147 P

第七章

円環からの帰還 176 P

最終章

ありふれた日常への回帰 189 P

後書き 204 P

序章第一節・まどかのいない世界

「待つて……！ 行かないで……まどかあああつ！！」

自らの悲鳴と共に、晝美ほむらは目覚める。

「……」

朦朧とした意識の中、ほむらはゆつくりと起き出す。

「またあの時の夢……」

毎日悪夢のようにうなされる、まどかとの別れの記憶。

全ての魔女を生まれる前に消し去りたいという願いによってまどかは魔法少女となり、全宇宙、全ての時間軸、全ての平行世界の魔法少女を救った。

でも、その代償としてまどかは概念と成り果て、この世界から完全に存在が抹消されてしまった。

そんなはずはない。どこかにまどかの痕跡が残されているはず。

一分の期待に望みを託し、見滝原中を歩き回った。

でも、学校にも街中にも、鹿目家にですら、まどか

の存在を指し示すものは何一つ見つけられなかった。

まどかのことを覚えているのは、自分だけ。まどかに会いたいと思つたらもう、過去の記憶を甦らせるしかない。でも……。

「おかしいよね。楽しい思い出もいっぱいあつたはずなのに。夢に見るのは、あなたとの別ればかり……」

辛いことばかりじゃなかった。二人で過ごした大切な時間もあつた。

でも、思い出そうとすれば思い出すほど、永別の悲哀に押し潰されそうになるだけ。

最愛の親友を失つた悲しみの大きさに、ほむらは耐え切れずにいた。

「またあなたと会いたい、会いたいよお……。まどかあ、まどかあ……」

そしてほむらは、唯一残された形見であるまどかのリボンをギュッと抱き締めながら、ただただ泣き続けるだけだった。

「本当に行ってしまうのね、曉美さん」

「ええ。ここにいっても虚しいだけだから」

校門で寂しそうな顔で見送る巴マミに対して、ほむらは乾いた声で応えた。

「あなたの気持ちは分からないでもないわ。佐倉さんも美樹さんが円環の理に導かれてから、随分気落ちしているみたいだし」

でもやっぱり、あなたの語る鹿目まどかという魔法少女のことは全然知らないわと、ママは申し訳ない顔をする。

「そう……」

いくつかの世界じゃ私より一緒に戦った期間が長い子なのになと、ほむらは切ない顔で俯く。

「巴ママ。あなたがまどかのことを覚えていなくても仕方ない。でもこの学校には、私がまどかと過ごした思い出が、沢山刻まれている」

だから今でも、ひよっこりとまどかが顔を出すんじゃないかって、つい錯覚してしまう。

学校に来る度に在りし日の思い出が蘇り、まどかを

失った悲しみに耐え切れなくなってしまう。

だから心が潰れてしまう前に、どこか遠くの街の学校へ転校しようと思ったと、ほむらは心の内を告白する。

「そう。新しい街に行っても、魔法少女は続けるのかしら、曉美さん」

「いいえ。今の私にはもう、戦う理由がないわ」

自分が今まで数多の平行世界を巡って戦い続けたのは、全てはたった一人の大切な親友、鹿目まどかを救うため。

まどかと交わした約束を忘れず胸に抱き、魔法少女にさせまいと尽力し続けた。

でも、結局自分はまどかを救えなかった。それどころか、またまどかに救われてしまった。

いつものように魔法で時間を巻き戻したとしても、その世界にはまどかの存在はない。

永遠に願いが叶わないのならば、もはや魔法少女として戦い続ける意義は何も見い出せないと、ほむらは何もかも諦めたような声で呟く。

「残念ね。でも、最近では魔獣の姿をさっぱり見掛けなくなつたし、羽休みをするにはいい時期かもしれないわね」

美樹さんを失い、佐倉さんも意気消沈してしまった。その上で曉美さんまでいなくなつてしまうと、随分と寂しくなつてしまう。

だから自分自身も、この機会に心の整理を付けてみよう、ママは領く。

(魔獣……)

ママから聞いた話では、彼女たちは魔女や使い魔ではなく、魔獣という存在と戦い続けているとのことだった。

実際目にしてないので、どういった存在かは分からない。だけど、魔獣が現れなくなったのはきつとまどかのお蔭ねと、ほむらは思うことにしていた。

「それじゃあ、さようならバママ」

「ええ。新しい街でも元気でね、曉美さん」

そうしてほむらはママに別れの言葉を告げ、見滝原を去る。まどかのいない世界で、少しでも絶望しない

で生きていくために。

序章第二節・魔法少女の物語

「のどが渴いたクル〜。みゆき、ジュースデコルを出して欲しいクル〜」

「うん。分かったよ、キャンディ」

メルヘンランドの秘密基地で、いつものようにみんなでくつろいでいる中、ふとキャンディが飲み物を所望した。

『レッツゴー、ジュース!』

キャンディにせがまれるまま、星空みゆきは自分のスマイルバクトにジュースデコルを取り付け、出現したジュースをキャンディに与えた。

「あたしもお腹空いたな。何か食べるものない?」

キャンディが美味しそうにジュースを飲む様を見て空腹感を刺激された緑川なおは、物欲しげな顔で食糧を求めた。

「困りましたね。持参したお菓子類は既に食べてしまいましたし」

何とかなおの空腹を満たしてあげたいところだけど、青木れいかは頬に手を当てながら困惑する。

「あかね。お好み焼き焼いてよ」

「無茶言うな! 鉄板どころか材料もなくて、どうやって焼くんや!」

うちかて材料と機材さえあれば焼いてあげられるのにやなど、日野あかねはツツコミを入れつつも申し訳ない顔をする。

「そうだ! あそこに行けば!!」

そんな中、突然黄瀬やよいは何かを閃き、すつくと立ち上がった。

「何か食べ物がある場所知ってるの? やよいちゃん」

「ほら! 前にメルヘンランドを案内された時、お菓子の家に行ったでしょ?」

だからあそこに行けばお菓子食べ放題だよと、やよいはなおに語り掛ける。

「お菓子の家かあ」

甘い物をお腹いっぱい食べられるだなんてと、なお

は涎を垂らしながら喜ぶ。

「面白そうー！ みんなで行こつ、行こつ！」

子供の頃絵本で読んだ時から、お菓子の家のお菓子を食べるのが夢だった。前行った時はあんまり食べられなかったから、いつかまたゆっくりと食べてみたいと思っていたと、みゆきは目をキラキラと輝かせる。

「せやな。うちも正直、少し小腹が空いとったし」

「そうですね。私も、何か口にしたいと思っていたところですよ」

「キャンデイもお菓子を食べたいクルー！」

他のみんなも賛同し、一同はお菓子の家へと向かうのだった。

「それじゃあ早速、いっただきまーす！」

お菓子の家に着くや否や、なおは早々にお菓子を食べようとする。

「あらっ？ 今のは？」

お菓子を口にしようとしたなおの前を何かが通り過

ぎたのを、れいかは目撃した。

「痛ったー!？」

次の瞬間、突然なおは悲鳴をあげる。

「なっ、なおちゃん、どうしたの!？」

声に驚き、みゆきはお菓子を食べるのを中断し、なおの元へと駆け付ける。

「ゆっ、指〜!」

お菓子を食べようと思ったら、思いつ切り噛んでしまったと、なおは涙目で痛がる。

「何や、せつちやなあ」

いくら腹が空いていたとはいえ、落ち着いて食わなアカンと、あかねは頭をかきながら苦笑する。

「ちっ、違うんだって！ さっきまで確かにあったのに〜!」

食べようと思ったらいつの間にかお菓子が消えてしまったと、なおは目に涙を浮かべながら語る。

「んなアホな!？」

お菓子が神隠しに遭うなんてあるわけないやろと、あかねはツツこむ。

「もしかしたら」

「何か心当たりあるの、れいかちゃん？」

「ええ。実はさつき」

れいかはみゆきの質問に答えるように、目撃談を語る。

「先程は見違えたかと思ったのですが。なおのお菓子が無くなった事実を考えると、何者かがお菓子を奪つたとみて間違いないようですね」

「何者ってなんや？　メルヘンランドにお菓子が大好物な、ドデカい虫でもいるんかいな？」

「むっ、虫くく!？」

あかねの口から虫の言葉が出たことに、なおは青ざめた顔で身震いする。

「メルヘンランドのUMAかあ。どこかな？　どこかなー？」

そんななおとは対照的に、未確認生物に興味を示したやよいは、ウキウキしながら室内を見渡す。

「あーっ！　なんかいるクルー!!」

そんな中、キャンデイが大声で部屋の片隅を指差す。

「なんや、なんや」

一体何を見つけたのだろうと、あかねはキャンデイの指差した方向に目を向ける。

「あっ!？」

すると、そこには手にお菓子をいっぱい抱えた、小さな人形のような生き物がいた。

「何だろうあの子？　ヘンゼルとグレーテルでもないし」

メルヘンランドの妖精たちは、何かしらの物語の登場人物を基にしている。でもあんな姿の子が出て来る絵本は読んだことないって、みゆきは首を傾げる。

「キャンデイも知らないクル。お兄ちゃんに聞いて来るクルー」

件の生き物は、自分も見ることがない。物知りなポップお兄ちゃんなら何か知っているかもしれないと、キャンデイはそそくさとお菓子の家を後にする。

「何や。不思議と可愛い子やな」

小さな生き物は、青色の目にピンク色のリボンを結んだような頭格好をしていた。身長は五十センチほど

しかなく、可愛い物が好きなあかねは、目が離せなかつた。

「確かに可愛いけど……って、あーっ！ あたしが食べようと思ってたお菓子ー！」

あかねに釣られてまじまじと生き物を見るなお。するとその手には消えたお菓子がいっぱい掴まれていると、声を荒げる。

「返せー！ あたしのお菓子ー！！」

奪われたお菓子を取り戻そうと、なおは生き物に飛び掛かろうとする。

「！！」

するとお菓子を持った生き物は、血相を変えて飛び付こうとするなおの動きに気付き、咄嗟にお菓子の家からの逃亡を試みる。

「逃がすかー！！」

このまま盗まれてなるものかと、なおは生き物の後を追い掛けようとする。

「待つんや、なお！ 別に追っかけへんでもええやろ！」

お菓子なら周りに余るくらいあるんだから、わざわざ盗んだ相手を捕まえる必要はないと、あかねは論そうとする。

「黙って引き下されるかー！」

確かにあかねの言う通りかもしれない。だけど、盗まれたままだと腹の虫が収まらないと、なおは怒り心頭に生き物の後を追い駆ける。

「まっ、待ってよ、なおちゃん！」

無闇に追い回したら迷子になっちゃうよと、みゆきはあたふたとなおの後を追う。

「待って、みゆきちゃん、わたしもー」

キャンディでさえ知らないメルヘンランドの不思議生物の正体が気になって仕方ないと、やよいも続く。

「いかような理由があれば、人の物を取るのには、道を外れた行為ですね」

だから自分があの子に正しい道を示してあげる必要があると、れいも追跡に加わる。

「しゃーない。こうなったら乗り掛かった船や」

一人だけ残っていても仕方ないと、あかねは溜息を

吐きながら、お菓子の家を後にするのだった。

「まっ、待てー！ ドロボー!!」

大声で叫びながら、小さな生き物を必死に追うなお。走るのには自信があるなおだったが、相手もなかなかすばしっこく、容易には捕まえられなかった。

「はあはあ。もうええんとちやうか？」

走り疲れたあかねは息を切らしながら、大人しく諦めて他のお菓子を食べればいいのではないかと助言する。

「イヤだ！ あたしはあれが食べたいんだ!!」

なおは断固として拒否し、意地でも追い付いてやると、懲りずに後を追いつける。

「なお！ 待ってください、その先は!!」

小さな生き物はそそくさと森の中へと逃げて行った。そのまま深追いして道を知らない森の中へ入ってしまうと、迷子になってしまう可能性が高いと、れいかはなおを呼び止めようとする。

「待てー！」

しかしなおは聞く耳を持たず、森の中へと入って行く。

「ど、どこ行ったー？」

小さな生き物を草木が生い茂った森の中で追跡するのは困難を極め、なおはどうとう見失ってしまった。

「食いそびれたあ」

小さな生き物にまんまと逃げ切られてしまったことに、なおはペタンと地面に膝を付く。

「ううう。もう動けない……」

ただでさえ空腹なところに全力疾走してしまい、なおはすっかりと体力を使い果たしてしまった。

「しゃーない。うちが抱えてってやるわ」

なおに追い付いたあかねは苦笑しながら、なおの手を掴んで肩車する。

「ううっ。ごめん、あかね」

「気にせんでええ。うちの仲やし。にしても……」

右も左も分からない森の中を果たして無事に抜けられるだろうか、あかねは不安な表情で歩き始める。

「なおー！ あかねさーん！」

「おっ！ あの声は」

しばらく森の中を歩いていると、聞き覚えのある声が響いて来て、あかねたちは声の方へと向かう。

「れいか！」

声の主は、二人の後を追っていたれいかだった。

「二人とも、ご無事で何よりです」

一時は姿を完全に見失っていたけど、こうして発見できて良かったと、れいかはホッと胸を撫で下ろす。

「けど、れいかと合流したって」

帰り道が分からなければ遭難するだけだと、なおはあかねからずり落ちるように、ぐったりとした顔をすする。

「心配いりません。二人の後を追いながら、お菓子を少しずつ千切って道しるべにしてみましたので」

だから欠片を辿れば無事に戻れると、れいかは二人を安心させる笑顔で語る。

「さすがれいか！ そうと決まれば！」

さっさと戻って腹いっぱいお菓子を食べるぞと、な

おは急に元気になって二人を先導する。

「現金な奴やなー。にしても、ホンマお手柄や、れいか」

あかねはなおの変わり身の早さに苦笑しつつ、れいかの功績を褒め称える。

「いいえ。これもすべてみゆきさんのお蔭です」

「みゆきの？」

「ええ。みゆきさんがヘンゼルとグレーテルの名前を出さなければ、私も咄嗟の機転を利かせられませんでした」

グリム童話のヘンゼルとグレーテルでは、母親に森に捨てられた兄妹が、小石やパンくずを道しるべとして家へ帰って来るエピソードが語られている。

れいかはその逸話を思い出しながら踏襲し、お菓子を道しるべにするアイデアを閃いたと語る。

「そういうや、みゆきとやよいはどないしたんや？」

二人とも足はお世辞にも速いとは言えない。恐らくまだ森の中を彷徨っているのではと、あかねは二人の身を案じる。

「心配はいらないでしょう。みゆきさんなら、道端に落ちているお菓子の意味を理解してくれるでしょうから」

だから自分が落としたお菓子の後を辿って合流できるはずだと、れいかはみゆきに信頼を寄せる。

「せやな。ほな、とつとと戻ろうか」

確かにみゆきがヘンゼルとグレーテルのエピソードを知らないわけがないと、あかねは納得しつつお菓子の欠片を辿りながら、来た道を引き返すのだった。

「まつ、待つてよお。なおちゃん、あかねちゃん、れいかちゃん」

その頃みゆきは、へトへトな顔で三人の遙か後ろを走っていた。

「もつ、もうダメエ。みつ、水〜」

体力の限界を迎えようとしていたみゆきは膝を付き、喉の渴きを訴える。ジュースデコルがあれば潤せるのだが、生憎デコルデコルはキャンデイが所持してお

り、手元になかった。

「みゆきちゃん、あそこ！」

みゆきと並ぶように走っていたやよいは、声をあげて森の先を指差す。

「いつ、泉だー！」

やよいに指差された先を見つめると、森の先の開けた場所には泉が広がっていた。

「みつ、水ー！」

みゆきはまるで砂漠でオアシスを発見した旅人のように、無我夢中で森の泉へと駆け付ける。

「あつー！」

すると、泉の前には青いショートカットの人魚がいた。ひよつとしてここは人魚の住処。断りもなく水を飲んではいけないだろうと、みゆきはピタリと足を止めた。

「あつ、あの、こんにちは」

水を飲む許可をもらおうと、みゆきは人魚に声を掛ける。

「何？ あたしに何か用？」

人魚はまだかの声に反応し、振り向く。

「あつれえー？」

人魚の顔を凝視するみゆき。人魚といえば西洋的な美少女が一般的だけど、目の前にいる人魚の顔は、自分と大して年齢が変わらない日本人少女の顔だった。

「えっ、えーと。あのお……」

思い描いていた人魚のイメージとあまりにギャップのある姿に、みゆきは混乱して言葉を詰まらせる。

「んー？ その顔だと、もつと可愛い想像してた？」

人魚はみゆきの心中をえぐり出すように、目を細めながら揺さぶりを掛ける。

「えっ！ そのっ、あのっ……アハハッ」

図星を付かれたみゆきは、目を泳がせながら乾いた声で笑う。

「可愛い人魚だと思った？ 残念！ さやかちゃんですたー！」

人魚はみゆきをからかうように、唐突な自己紹介を始める。

「へっ？ さっ、さやかちゃんって……につ、日本人

ー!？」

明らかな和名に、みゆきは腰を抜かすようにビツクリ仰天する。

「正確には、こうなる前だけどねー」

人間界にいる時は美樹さやかという名の、極一般的な日本人少女だったと、さやかは語る。

「へえ。よく分からないけど、面白そー。わたしは星空みゆき。よろしくね、さやかちゃん！」

さやかかが人魚になった経緯に興味を示したみゆきは、目を輝かせながら自己紹介する。

「わたしは黄瀬やよい。人間界ってことは、一度死んでメルヘンランドに転生したのかな？」

やよいは自己紹介しつつ、推論を述べながらさやかに訊ねた。

「うーん。転生なのかな？」

確かに人間としての自分とはつくに消滅しちゃったけど、自分が美樹さやかという存在には変わりがないと、さやかは答えに窮する。

「おーい！ みゆきー！ やよいー!!」

そんな時だった。森の奥から二人の名前を呼ぶ声が響き渡った。

「あつ！ あかねちゃんの声だ！ 戻らなきゃ。でも……」

もつとさやかちゃんの話の聞きたいなって、みゆきは頭を悩ます。

「そういうことなら、あたしも付いてくよ」

見たところ二人は普通の人間。メルヘンランドで人間と会ったのは初めて。だから久々に自分も人間界のことを色々聞きたいなど、さやかは乗る気だ。

「えっ？ でもその足じゃ」

下半身が魚の形をしていては歩けないのではと、みゆきは指摘する。

「だいじょぶ、だいじょぶ。見てて」

さやかは二人の前に指輪をはめた右手を掲げる。すると次の瞬間さやかの身体は光り輝いて、見る見るうちにファンタジー風な衣装を羽織った人間の姿へと変貌した。

「へっ、変身したー！」

まさかプリキュアである自分たち以外にも変身する少女がいるだなんてと、やよいは大声で興奮した。

「すごーい！ ひよっとしてさやかちゃんもプリキュア？」

まさかとは思うけど、六人目のプリキュアなのと、みゆきは訊ねた。

「アハハ。あの伝説の戦士とかつて奴。ないない」

しかしさやかは、自分はそんな大それた存在ではないと、あっさりプリキュアであることを否定する。

「えっ、じゃあ？」

「あたしは魔法少女。魔法少女のさやかちゃんだよ！」

「まっ、魔法少女ー！」

いかにもおとぎ話に出て来るような存在に、みゆきは興奮した声で叫ぶ。

「そ。もつとも今は、大した力が残ってないけどね」

嘗てあった魔力はほぼ失われ、今の自分には人間と人魚の姿を使い分けるくらいしかできないと、さやかは語る。

「ということ、人間界にもララベルちゃんやなのは

さんみたいな魔法少女がいるってことー！」

ブリキユアみたいな女の子が夢見る変身ヒロインが存在していただなんてと、やよいはいつも以上にハイテンションだ。

「うん。この魔法少女の森には、嘗て魔法少女として戦つてた子たちがいっぱいいるんだよ」

詳しくは二人の友達と合流してから話す、さやかはみゆきたちと共に声の方向へと向かうのだった。

「おーい！ あかねちゃーん!!」

「おっ！ ようやつと来たな。みゆきー」

みゆきの声が聞こえると、あかねは声をあげながら手招きする。

「ゴメン、あかねちゃん。いつの間にかはぐれちゃつて」

合流するや否や、みゆきは離れ離れになってしまったことを謝った。

「気にせんでもええ。元はといえばなおが無茶したせ

いやし」

「うん。ゴメン、みゆきちゃん」

あかねに促され、なおは両手を合わせて謝罪した。

「いつ、いいよ、そこまでしなくても。とつ、とにかく戻ろ」

「せやな。やよいも無事みたいやし。六人揃つたところで……って、一人多いやー!？」

いつの間にか混ざつていたさやかの存在に気付き、あかねが声を荒げてツツコむ。

「あたしは美樹さやか。よろしくー」

「ほっ、ほなよろしゅう。うちは日野あかねや」

あかねは戸惑いつつもみゆきたちと一緒にいるのだから悪い人なわけがないと思ひ、自己紹介をした。

「ねーねー、聞いてよー！ さやかちゃん、魔法少女なんだつてー」

やよいは目をキラキラと輝かせながら、さやかの正体をあかね、なお、れいかに伝えた。

「魔法少女って、何やそれ？」

「意味合い的には、魔法使いの少女ということでしょ

うか？」

初めて聞く単語だと、あかねとれいかは揃って首を傾げる。

「詳しくは、あなたたちの秘密基地に着いたら話すよ」

「そうですね。私は青木れいかと申します。以後お見知りおきを」

「あたしは緑川なお。よく分かんないけど、よろしく
れいかに続きなおが自己紹介をし、六人はお菓子の
道しるべを辿りながら森を抜け出し、秘密基地へと戻
って行つた。

「お帰りクルー。お兄ちゃん呼んできたクルー！」

基地へと戻るや否や、キャンデイが呼び寄せたポツ
プと共に出迎えてくれた。

「まったく。人を呼んでおいて、今までどこをほつ
き歩いていたでござるか」

キャンデイに呼ばれてお菓子の家へ赴いたがいいが、
誰もいない。闇雲に探し回るよりは秘密基地で帰りを
待っていた方がいいだろうと思っていたが、正直待ち
くたびれたと、ポツプは憤りつつどこへ行っていたの

か訊ねる。

「ごめんポツプ。お菓子の家にぬいぐるみみたいな子
が紛れ込んでから、色々なことになっちゃって」

みゆきは謝罪しつつ、事の一部始終をポツプに語つ
た。

「成程。そういうことでござったか。そのぬいぐるみ
みたいな子は、シャルロットでござるな」

特徴や趣向からして間違いないと、ポツプは語る。

「シャルロット？ 知ってるの？ ポツプ」

「当然でござる。シャルロットはさやか殿と同じ、魔
法少女でござる」

「へえ。魔法少女のことも知ってるんだー」

なら物知りなポツプに聞いた方が早いと、みゆきは
訊ねる。

「分かったでござる。魔法少女とは、たった一つの願
いと引き換えに、過酷な運命を歩むこととなった少女
たちのこととござる」

「たった一つの願い？」

「そうですね。インキュベーターという地球外知的

生命体が、どんな願いでも叶えてあげる代価として提示するのが、魔法少女でござる」

「どんな願いもって、例えば一生お腹いっぱいご飯を食べたいって願えば、叶ったりするの」

「そうでござる」

現に件のシャルロットという少女は、一つ切りのチーズケーキと引き換えに魔法少女になったと、ポツプは語る。

「あつ、あたし、アイツと考えることおんなじ……」

例えとして出したのが、自分のお菓子を奪った食いしん坊とあまり変わらないことに、なおは意気消沈する。

「気にしない、気にしない。あたしだって満漢全席とか例えに出しちゃったし」

実際の願いじゃないんだからそれほど気に病むこともないと、さやかはフォローを入れる。

「そういうさやかちゃんは、どんな願いを叶えてもらったの？」

「あたし？ あたしはね、大切な幼馴染みの手を治してもらいたくて、魔法少女になったんだよ……」

やよいの問い掛けに、さやかは薄っすらと目を細めて語り始める。

天才的なヴァイオリニストの素質を持った幼馴染み、上条恭介。しかしその左腕は、現代医学では治療不可な傷を負ってしまった。

医者に匙を投げられ自暴自棄になった恭介に、「奇跡も魔法もあるんだよ」と優しい声で慰め、自分は契約を結んだと。

「さやかちゃん、ひよつとしてその人のことが」

好きだったんだねと、やよいは興味津々な声で訊ねる。

「うん。片思いだったけどね」

恭介は自分を仲のいい幼馴染みとしか思っていなかったと、さやかは切ない顔で顔で呟く。

「でもロマンチックだなー。大好きな人のために魔法少女になるだなんてー」

もしもプリキュアにならなかつたら、自分も絶対魔法少女になっていたと、みゆきはハキハキとした顔で語る。

「うんうん。さやかか気持ちちはよく分かるで。うちかてプライアンがごつつ大変な目に遭ったら、契約したかもしれへん」

自分の場合淡い恋心でしかなかったけど、慕っている人のためなら迷わず願いを叶えてもらおうと、あかねは首を大きく縦に振って頷く。

「ところが、そう上手い話でもないのでござるよ」

ポップは真剣な顔で語り始める。一見夢のような契約には、悪夢のような事実が隠されていると。

「まずは、魔法少女となった者は、魔女と戦わなくてはならないのでござる」

それはアカンベエとは比較にならないほど禍々しく強力な存在であると文献に記されていると、ポップは語る。

「でっ、でも、戦いならわたしたちだっつて」

プリキユアとして数多くの戦いをこなした。例え魔女と戦わなくちゃいけないなくても、魔法少女は魅力的な存在だとみゆきは声をあげて反論する。

「次に、魔法少女となった者は、魂をソウルジェムに

収納されるのでござる」

「ソウルジェム。それは一体どのようなものなのでしょう？」

「口で説明するより、実際に見てもらった方が早いのでござるな。さやか殿」

「うん。ほら、これのことだよ」

さやかは先程変身に使用した指輪を見せ、これに自分の魂が収められていると、さやかははいかの質問に答える。

「何か気持ち悪いね、それ」

自分の身体が身体じゃなくなるみたいだと、なおは身震いする。

「そして、ソウルジェムの最大の秘密。魔法少女は魔法を使う度ソウルジェムが黒く濁るのでござるが、その穢れを払い切れなくなった時、魔法少女は魔女になるのでござる」

「えっ？ どういうこと!? なんて魔法少女が魔女に……」

ポップの言っていることが理解できないと、みゆきは

困惑した顔で訊ねる。

「それがインキュベーターの狙いなのでござる。魔法少女が魔女へと孵化する瞬間、希望が絶望に相転移する時に、膨大な負のエネルギを発生するのでござる」

そのエネルギを回収したいがために、インキュベーターはどんな願いでも叶えてあげるといふ甘い言葉で少女たちを誘い、魔女に仕立て上げるのだと。

「負のエネルギ。それではまるで」

バッドエナジを収集するバッドエンド王国とまったく同じではないかと、れいかは指摘する。

「その通りでござる。手段も集める量もバッドエンド王国とは比較にならぬほど凶悪でござるが」

何より厄介なのは、インキュベーターたちは自分たちが宇宙のために正しいことをしていると思っっていることだと、ポップは語る。

「確かに、バッドエンド王国の人たちは、不幸や悪を自覚してやっている」

だから、バッドエンドはある意味分かりやすい悪役でも、自分を正義だと信じて止まない悪ほど恐ろしい

物はないと、やよいは真剣な顔で語る。

「いや、やよい殿。そもそもインキュベーターは、正義や悪という概念を持っていないのでござる」

それは人間とは全く違った価値観を持った生物。だから、どんなに人類の価値基準で話しても理解してもらえないと。

「ふえ、うえーん！」

ポップの話聞いてるうちに、みゆきは突然大粒の涙を流して泣き出した。

「いつ、いきなりどうしたんやみゆき」

「だって、だってえ、悲し過ぎるよ！魔法少女の子たちは自分と同じ魔法少女だった人たちと戦って、最期は自分とおんなじ魔法少女に倒されちゃうんだもん！！」

こんなに救いようのない、人魚姫より悲しい物語は聞いたことがないと、みゆきは嗚咽交じりの声で泣きじゃくる。

「みゆき殿。安心するでござる。今までの話は、嘗ての世界での魔法少女の話でござる」

この世界の魔法少女は魔女になる前に消滅してしまうと、ポップはみゆきを宥めつつ語る。

「ヘッ？ どういうこと？」

ポップの言っていることがよく分からないと、みゆきはキョトンとした顔で訊ねる。

「平行世界、と呼ばれるものですね」

ようはこの世界と似ているけど異なる世界での話なので、れいかは語る。

「うーん、成程。ようはシュタインズ・ゲートが選択した、異なる世界線での話ってことだね」

「いや、余計ややこしくなってるやん」

やよいは納得したかもしれないが、自分にとってはその説明の方が意味不明やと、あかねはツッコむ。

「そうでござる。この世界は一度再編されたのでござる。鹿目まどかという、たった一人の魔法少女の願いによって」

ポップは語る。まどかという少女は、過酷な結末を迎える魔法少女たちを救おうと身を挺して、世界のルールを変えた。

「まどかはあたしの、大切な親友だったんだ……」

もちろんそれは、平行世界での話。自分が生きている間は、まどかという少女は、自分の側にいなかった。

「ソウルジェムが濁り切ってどうしようもなくなった時、まどかがあたしの目の前に現れて、あたしを救ってくれたんだ」

その時、嘗ての世界でのまどかの記憶を思い出したと、さやかは昔を懐かしむように語る。

「うえーん。良かったよお。みんな救われたんだねー」
 バッドエンドにならなくて本当に良かったと、みゆきは嬉し涙を流す。

「でも、おかしいですね。先程の説明ですと、魔法少女は消滅するというお話でしたが」

ならば何故、消えたはずのさやかさんがメルヘンランドの住人になっているのだと、れいかは指摘する。

「それはでござるな。ロイヤルクイーン様が救ったのでござる」

鹿目まどかの願いを持ってしても、魔法少女たちを元の人間に戻すことはできなかった。魔女にはならな

いとはいえ消えてしまうのは可哀想だと嘆いたロイヤルクイーン様が、消滅するはずの魔法少女のソウルジエムをメルヘンランドへと導き、妖精として住まわせるよう手配したと、ポップは語る。

「まどかにもだけど、ロイヤルクイーン様にも感謝しなくちゃね」

人間界じゃないけど、こうして平穩無事な生活を送れるのだからと、さやかは笑顔で語る。

「ねーねー。ポップ。まどかちゃんもここにいるの？」
世界を救った魔法少女に是非とも会ってみたいと、

みゆきは訊ねる。

「残念ながら、まどか殿はどこにもいないでござる」

世界のルールを変える願いを託したまどかは、自らをも魔女になる直前浄化し、一つの概念となったと、

ポップは語る。

「うーん。ようは神様になっちゃたってこと？」

困ったことがあると神様お願いって頼んじゃうけど、神様は目に見えない。

でも、きつとどこかで自分の願いを聞き入れてくれ

ると信じて止まない。まどかちゃんもそんな存在なると、みゆきは訊ねる。

「そうでござるな。神と表現するのが、一番適切かも知れんでござる」

地球上には存在の痕跡すら残されていないが、異なる世界であるメルヘンランドには書物としてまどか殿のことが記されていると、ポップは説明する。

「そっかあ、残念。でも……」

もしも会えるのなら、まどかという少女に会ってみたいと、みゆきはまどかとの邂逅を夢見るのだった。

第一章・笑顔を忘れた転校生

「今日は転校生を紹介します」

数日後。みゆきたちのクラスには、新たな転校生が訪れた。

「なんや。また転校生か。今度はさすがに人間やるな」
担任の先生の話聞き、あかねはツツコまずにはいられなかった。

何せこの間は、人間に化けたバットエンド王国の幹部たちが、平然と転校生を装っていた。あれからまだそう日が経ってないだけに、あかねはついつい警戒してしまった。

「あかねちゃん。それだとまるで、わたしが人間じゃないみたいだよ〜」

「すまん、すまん。別にみゆきのことを言ったわけじゃあへん」

誤解を与えてしまったことに、あかねはテヘッとベ口を出しながら謝った。

「でも転校生かあ」

みゆきは自分が転校して来た時のことを思い起こした。あの時は緊張のあまり、最初は自己紹介さえまともにできなかった。

そんな中初対面のあかねちゃんが接してくれたことで緊張感が解れて、クラスにもすんなりと溶け込めた。

もしも新しい転校生が自分と同じ境遇だったら、今度はわたしがフォローするんだと、みゆきはウキウキと転校生が教室に入ってくるのを待ち兼ねた。

「それでは入って来てください、曉美さん」

「はい」

担任の先生に紹介されると、ほむらは冷めた声で返事をして、教室の中へと入る。

「わあ」

黒くて独特のウェーブのかかったロングヘアに、どこか知的でミステリアスな雰囲気ほむらに、みゆきは心惹かれた。

(友達になれたらいいなあ)

ちよっと近寄りたいたい感じではあるけど、だからこ

そ親密な間柄を築き上げたいと、みゆきは心の底から思った。

「では早速自己紹介をお願いします、暁美さん」

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

それだけ言うと、ほむらはスタスタと歩き、空いていた机に着席する。

「あつ、あの、暁美さん……」

淡々と名前を語っただけで自己紹介を終えてしまったことに、担任はどう対処したらいいか分からずうろたえる。

「なんや、えらい素っ気ない子やな。みゆきとは大違いや」

みゆきの時は緊張しているのが丸分かりでフオーロを入れられたが、ほむらの感情は読み取れず、自分にはどうしようもないとあかねは苦笑する。

「うん。きつと前の学校で何か悲しいことがあったんだと思う」

あまり考えたくはないけど、ほむらちゃんは前の学校でイジメとかに遭って転校して来たのかもしれない。

それなら周囲と距離を置こうとしても不思議じゃないと、みゆきは推察する。

「よーし！」

ならわたしが友達になつてほむらちゃんをウルトラハッピーにするんだって、みゆきは張り切つてほむらの机へと向かう。

「おつはよう、ほむらちゃん！ わたし、星空みゆき。これからよろしくね、ほむらちゃん！」

みゆきはほむらの席の前に立ち、腕を大の字に広げながら大きな声で自己紹介する。

「そう。よろしく」

しかしほむらは、無表情で乾いた返事をするだけで、みゆきは完全に蚊帳の外だった。

「なっ、何か困ったことがあったら、遠慮なく相談してね、ほむらちゃん」

出鼻を挫かれてまごつくみゆきだったが、何とか持ち直して、ほむらと友達になろうと声を掛け続ける。

「そう」

（ううっ、どうしようく！ ほむらちゃん、全然接

しようとしてくれない)

懸命に声を掛け続けるものの空振りに終わってしま
い、みゆきは上の空で顔に大粒の汗をかく。

「……」

ほむらは突然立ち上がり、無言で席を立とうとする。

「どっ、どうしたの、ほむらちゃん？」

「ちよつと気分が悪くなったわ。保健室に行つて来る」

そう言い残し、ほむらは教室を後にしようとする。

「だっ、だったらわたしが連れてつてあげる！」

ほむらちゃんと会話する絶好の機会だと、みゆきは

率先してほむらに同伴しようとする。

「星空さん、あなた保健委員？」

すると今度は先程までとは違い、ほむらが聞き返し

て来た。

「うっ、ううん。違うよ。でっ、でもっ！」

わたしが側においてほむらちゃんの面倒を見てあげる

よと、みゆきは必死にアピールする。

「そう。なら、その必要はないわ」

ほむらはサラッと後ろ髪をかきあげながら、教室を

後にするのだった。

「あちゃー。あれは完全に嫌われたな、みゆき」

一部始終を見守っていたあかねは、ほむらは執拗に

接するみゆきに嫌気が差して保健室に行ったんだと、

やれやれとした顔で語る。

「はっぷっぷー。でも諦めないもん！ わたし、絶対

ほむらちゃんと友達になつて見せるんだから!!」

みゆきは口を3の字にして落胆するものすぐに立

ち直り、ガッツポーズをしながら決意を新たにすの

だった。

(星空みゆき。あの子はまるで……)

一人廊下を黄昏て歩くほむら。自分に明るく元気な

声で呼び掛けてくるみゆき。その姿は、初めて会った

時のまどかを思い起こさせるものだった。

まだ魔法少女になる前、身体の弱い一人の少女に過

ぎなかつた自分に、優しく声を掛けてくれたのがまど

かだった。

接し方はまどかと全然違う。でも、心の底に垣間見える無垢な優しさは、どこかまどかを思い出させる。

(ダメよ！ まどかのことを考えたら)

まどかを失った悲しみを少しでも癒すため転校したのに。ここでまどかのことを意識したら、また辛い気持ちになってしまっただけだと、ほむらは首を振ってみゆきとまどかを重ねるのをやめる。

あかねの推測に反し、みゆきはほむらに嫌われたわけではなかった。寧ろ、たった一人の掛け替えのない友達であるまどかを思い出させてしまうから、意図的に避けられているだけだった。

「うーん。めっちゃスゴイ子やな、晁美さんは」

昼休み。みゆきたちはほむらの話題で持ち切りだった。あかねは体育の時間、バレーボールの試合で自分という勝負をしたほむらを、素直に感心した。

「うんうん。あたしとあかねのコンビネーションプレイを打ち破るんなんで、大したもんだよ」

次は是非自分の得意分野であるサッカーで勝負したいと、なおは意気込む。

「勉強の方も、それなりにこなしてましたね」

転校したばかりで慣れないところがあるはずなのに、先生の質問にハキハキと答える様は見習うべきものがあると、れいかは左頬に手を当てながら語る。

「何よりクールでカッコいいー！」

どこかミステリアスなオーラを纏っているほむらちやんは、心の底からカッコいいと思える少女だと、やよいはやや興奮した声ではしゃぐ。

「うーん」

四人が四人ともほむらを称賛する中、一人みゆきは腕を組みながら思い悩んでいた。

「なんや、みゆき。まだほむらにあしらわれたのを根に持ってるん？」

「ううん、違うのあかねちゃん。何か変だなんて」

ほむらの行動には何か違和感があり、その原因を突き止めようとみゆきは思考を張り巡らせる。

「あっ！ そうか!!」

ようやく違和感の正体に気付いたと、みゆきはボンと左手を右手で叩く。

「おっ！ 何か分かったんか、みゆき？」

「うん。ほむらちゃん、全然笑わないんだ」

朝から今に至るまで、一度もほむらちゃんが笑ったところを見てないと、みゆきは語る。

「ほら？ 体育の授業で相手のチームに勝ったり、問題が解けて先生に褒められたりしたら、普通は嬉しくて笑顔になるものでしょ？」

程度の差こそあれ、人に褒められてハッピーじゃない人なんていない。だから無表情なのは絶対にヘンだよと、みゆきは力説する。

「言われてみれば、確かに」

自分も感情があまり顔に出ない人間だ。でも、ほむらさんは何も感じてないようにしか見えないと、れいかは分析する。

「単に奥手なだけかもしれへんがな」

そう思いつつも、みゆきの言うことは一理あると、あかねはうんうんと頷く。

「よし！ 放課後は絶対、ほむらちゃんと一緒に帰るんだ!!」

そしてほむらちゃんに笑ってもらうんだと、みゆきは決心するのだった。

「ほむらちゃん！ 一緒に帰ろっ」

放課後。みゆきは有言実行に、ほむらと一緒に下校しようとした。

「……」

ほむらは無言で立ち上がり、みゆきを無視したまま教室を後にしようとする。

「まっ、待ってよ、ほむらちゃん！」

まどかは急いでほむらの後を追う。

「ねえ、ほむらちゃん？ どうして笑わないの？」

みゆきはほむらに追い付き、素朴な疑問を投げ掛ける。

「私が笑わないと、星空さんに何か不都合でもあるのかしら？」

ほむらは少しムツとした顔で、みゆきに問い返す。
「うん。ほむらちゃんが笑わないと、わたしは寂しいよ」

みんなの笑顔を見てみると、それだけでウルトラハッピーな気分になる。だから逆にみんなの笑顔を見れないと、とっても悲しくなるとみゆきは語る。

「何か困ったことがあったら、わたしが相談に乗ってあげる。だからほら、笑ってほむらちゃん。そんな顔してたら、ハッピーが逃げちゃうよ。スマイル、スマイル！」

みゆきはほむらの側で満面の笑顔をし、ほむらを笑わせようとする。

「……。いい加減にして……！」

「えっ!?」

「いい加減にしてって言うてるのよ!!」

執拗に笑顔を迫るみゆきの態度にしびれを切らして、ほむらは激怒する。

「どうして、どうしてそこまで私に絡まるのよ。出会ったばかりなのに！」

「それはその。ほむらちゃんとお友達になりたいから」
みゆきは激しい感情を吐露するほむらに気圧されつつも、自分の素直な気持ちを告白する。

「私は友達を求めていないし、笑うことなんて、二度とない!」
だって、だって私はもうっ!!」

自分の命よりも大切な親友を、永遠に失ってしまった。そんな世界でどうやって笑えって言うのよと、ほむらは嗚咽交じりの声で叫ぶ。

「ほむらちゃん、その。ゴメン、迷惑、だったかな」
ほむらを笑わせるどころか、逆に怒らせてしまった。

自分の望む結果と真逆の展開に、みゆきは悲しい顔で俯く。

「いいえ。私の方こそ、感情的になり過ぎてしまった。そのことは謝罪するわ」

ほむらは冷静さを取り戻し、行き過ぎた言動を詫言した。

「でもね、星空さん。私はもう、あなたに関わって欲しくない。そのことだけはきちんと伝えておくわ」

絶交宣言をし、ほむらは立ち尽くすみゆきを避けな

がら帰路に就くのだった。

「なっ、泣いちゃダメ。わたしが泣いたら、それこそ本当に、ハッピーが逃げちゃう」

ほむらに辛辣な言葉を投げ付けられ、今にも泣き出しそうなみゆき。だけど、自分が悲しい気持ちになつたらほむらちゃんをハッピーにできないと、みゆきは必至に涙を堪える。

「ほむらちゃん。あなたの笑顔は、必ずわたしが取り戻してあげるから！」

ほむらちゃんは大切な友達を亡くしちゃって、悲しんでるんだ。だから心を閉ざして、わたしを拒絶するんだ。

だったら、こんなところで凹んじやられない。今は無理かもしれないけど、絶対にほむらちゃんを笑わせてハッピーな気分にしてあげるんだって、みゆきは涙を袖で拭いながら心に誓うのだった。

(何をやっているのかしら、私)

みゆきと喧嘩別れした後、ほむらは陰鬱な気分で下校する。別に星空みゆきを悲しませるつもりはなかった。ただ、あまりにまどかを思い起こさせてしまうから、つい拒絶してしまっただけだと。

(同じね、あの時と……)

ほむらはふと思いついた。そう言えば転校初日に上手くいかず、憂鬱な気分で行校し魔女に襲われた時もこんな感じだったと。

(もしかしたら……)

あの時みたく魔女に襲われたら、ひよっこりまどかが私を助けに現れるのではないか？ そんなことはありえないと分かり切っているのに、ほむらは淡い期待を抱かずにはいられなかった。

「ウルッフフ。随分と落ち込んでる女がいるじゃねーか！」

そんなほむらを、上空から見守る姿があった。ウェアウルフの姿をしたバットエンド王国の幹部、ウルフルンだ。

「ウルッフフ。ちようどいい。あの女のバッドエナジ

ーを頂くぜ！」

ウルフルンは邪悪な笑みを浮かべて、闇の絵本を取り出す。

「世界よ、最悪の結末、バッドエンドに染まれ！ 白紙の未来を黒く塗り潰すのだ!!」

そう言い、闇の黒い絵の具を握り潰し、闇の絵本を汚す。

すると周囲が結界に包まれ、ウルフルンはバッドエナジーが集まるのを今か今かと待ち続ける。

「！ これは!？」

いつの間にか周囲が見知らぬ景色に変貌していて、ほむらはハッとする。

(まさかこれは、魔女の結界!？ そんなはずは)

だって魔女は、まだかの願いにより生まれなくなっただけ。なのに何故自分は結界に迷い込んでしまったのだろうか、ほむらは戸惑う。

「！ この感じ!!」

同じ頃。みゆきも異変に気付いた。この周囲の変化は、バッドエンド王国の誰かがバッドエナジーを集め

出したんだと。

「ほむらちゃん!？」

みゆきは察した。恐らくほむらちゃんは襲われて、バッドエナジーを吸い取られている。急いで駆け付けて助けなきゃと、みゆきは他の四人を呼び寄せつつ、バッドエンド空間の発生地域に急ぐのだった。

「ウルッフフ！ あの女の発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピーエロ様を復活……って、アレエツ!？」

何故だかほむらからはまったくバッドエナジーを絞り出せず、ウルフルンは目玉が飛び出るように驚く。

「馬鹿な！ 何でだ、何でだ!？」

バッドエナジーを回収できなかったのは、過去に一度。ハッピーの祖母を相手にした時だけだ。

だがあの時は、不幸知らずの人間を相手にしたからだった。

今回は違う。相手はいかにもバッドエナジーを抱えて生きているような人間だ。そんな人間が何故バッド

エナジーを発しないのだと、ウルフルンは激しく狼狽する。

「！ あれはっ！」

ほむらは原因を探ろうと周囲を見渡し、上空のウルフルンに気付いた。

「そう、あれが……！」

バマミの言っていた魔獣なのねと、ほむらは鋭い視線をウルフルンに向ける。

「デメエツ！ 何故だ、何故バッドエナジーを出さない!?」

ほむらの視線に気付कि、ウルフルンは声を荒げてほむらに問い詰める。

「バッドエナジー。魔獣のくせに、随分と洒落た言葉を使うのね」

どうやら人間の言葉を喋れるみたいだけど、大方キユウベえと手を組んで不幸の感情エネルギーを集めているのねと、ほむらは明確な敵意を向ける。

「俺の質問に答えやがれ！ 何故貴様は、不幸にならない!？」

「不幸？ 笑わせないで。この程度のことです、私を不幸にさせようっていうの」

「何だと!？」

「あなたのやっていること、魔女に比べたら全然大したことない。何度も絶望を味わった私がこの程度で動じると思ったら、大間違いよ!」

「何!？ 俺のやっていることが手緩いだと!！」

悪を自認する自分がこんな小娘に舐められてたまるか、ウルフルンはほむらの挑発に乗り激昂する。

「寧ろあなたの軽薄な行為には、怒りを覚えるわ!」

まどかが命懸けで救った世界を泥で塗る行為は絶対に許せないと、ほむらはギツとウルフルンを睨み付ける。

(グツ！ この女、一体どれだけの修羅場を潜り抜けたんだよ!?)

ウルフルンはほむらに気圧され、ビクツと背中を仰け反らせた。そして理解した。この女は想像もつかないほどの不幸を抱えている。負の感情の度合いが強過ぎるから、逆に回収できないのだと。

「クッ！ 舐められてたまるかよ！ 出でよ、ハイパーアカンベエ!!」

ここで根負けしたらバッドエンド王国の名が廃ると、ウルフルンは焦り顔で黒っ鼻を使用した。

「ハイパーアカンベエ!」

黒っ鼻は近くにあった乗用車と融合し、手足と顔の付いたコミカルな外見の車型アカンベエとして具現化した。

「アカンベエ? 随分と珍妙な使い魔ね」

魔獣が繰り出したのは恐らく、魔女の使い魔に相当するものだろう。

ただ、唇が厚くてペロを出したふざけた外見の魔物が、魔女の使い魔より厄介な相手には到底見えない。

「まあ、いいわ。あなたがまだかの創った世界を乱すなら!」

もう魔法少女としては戦わないつもりでいた。

けど、不幸を招き入れる存在を許してはおけないと、ほむらは額にソウルジェムを掲げる。

「なにいつ!」

ほむらが変身する様を見て、ウルフルンは驚愕した。
「テムエツ! まさか六人目のプリキュアか!」

魔法少女へと変身したほむらに、ウルフルンは戦慄を覚える。五人のプリキュアにでさえ散々苦汁を舐めさせられてきたというのに、これ以上増えてしまつては手の施しようがなくなると。

「プリキュア? 何のことかしら? 私は魔法少女よ」

「魔法少女だあ?」

何だかよく分からんが、プリキュアとは違う新たな勢力なのかと、ウルフルンは困惑する。

(妙ね?)

一方のほむらも、違和感を抱いた。もしも相手が魔獣だったら、何度もバママたちと交戦したはずだ。私をプリキュアなんて訳の分からないものと誤認するわけがない。

(! まさか!)

ほむらは一つの仮説を導き出した。別れ際、バママは最近魔獣を見かけなくなっていたと証言していた。

当初はまだかの願いによって存在がかき消されたと思っていた。

でももし、魔獣に代わって負の感情を招集している存在がいたとしたら？

「待ちなさい！」

(えっ?)

そんな時だった。周囲に凜々しい声が響き渡った。

(まっ、まさか!?)

ほむらは一瞬期待に胸を膨らませた。あり得ないに決まっている。でも今の状況は、まどかに助けられた時と!

「えっ?」

無論、それはまどかではなかった。だが、現れた人物は、ほむらが驚愕するには十分だった。

「星空……:…さん!」

それは、ついさつき喧嘩別れした、みゆきだった。

「えっ? ほむらちゃん、どうして!」

驚いたのはみゆきも同じだった。確かに自分はほむらちゃんの身を案じた。でも、バッドエナジーを吸収

されたどころか、敢然とオオカミさんと対峙している。

「みゆきちゃん、見て! あの格好、もしかして!」

変身したさやかちゃんにそっくりだと、やよいが指差す。

「ホントだ! ほむらちゃん、魔法少女だったの!」

「!」 星空さん、どうしてあなたが?」

魔法少女のことを知っているのかしらと、ほむらは怪訝な顔をする。

「みゆき、ポカンとしてる場合やない! 変身して戦わんと!」

ハイパーアカンベエが出現しているなら、一刻も早く倒さなアカンと、あかねは変身をせかす。

「でも、困りましたね。晁美さんがいらっしやる前では」

迂闊に変身できないと、れいかは消極的な姿勢を見せる。

「確かに、れいかの言うことは一理あるなあ」

今まで周囲に正体がバレないよう戦って来たのに、ここでクラスメイトにブリキユアであることが分かつ

てしまうと、色々と面倒なことになると、なおは相槌を打つ。

「大丈夫だよ。ほむらちゃんなら、クラスのみんなにはナイショにしてくれる！」

ほむらちゃんはプリキュアのことを知らないだろう。でも、ちゃんと訳を話せば自分たちのことを理解してくれるだろうと、みゆきは樂觀的な見解を示す。

「せやな。ほな、いくでみんな！」

ここはみゆきの言葉を信じようと、あかねは率先して変身しようとする。

「うん！」

みゆきが続いて他の三人も頷き、五人はスマイルパクトを掲げた。

『レディ……』

『プリキュア！ スマイルチャージ!!』

スマイルパクトから電子音が流れると、みゆき、あかね、やよい、なお、れいかは同時に変身開始の言葉を発し、キュアデコルをスマイルパクトに装着する。

『ゴー！ ゴーゴー！ レッツゴー!!』

すると、スマイルパクトがパカッと開いて、電子音と共に中から光のパフが出現する。そして五人は多種多様なモーシヨンで、見る見る姿を変えていく。

「キラキラ輝く、未来の光！ キュアハッピー!!」

ピンク色の髪に、ボリウムのあるおさげが特徴的なプリキュア。キュアハッピーに変身したみゆきだ。

「太陽サンサン、熱血パワー！ キュアサニー!!」

燃えたぎるような赤い髪のプリキュア。キュアサニーに変身したあかねだ。

「ピカピカぴかりん、じゃんけんポン！ キュアピース!!」

黄色い髪のプリキュア、キュアピースに変身したやよいは、両手をバカバカさせながらジャンケンし、最後は笑顔のダブルピースで決めた。今日のぴかりんじやんけんは、チョコキだ。

「勇気凛々、直球勝負！ キュアマーチ!!」

モフモフとした緑色の髪のプリキュア、キュアマーチに変身したなおが決めポーズを取ると、周囲には疾風が発生した。

「深々と降り積もる、清き心……。キュアビューティ
!!」

まるで舞い散る粉雪のように美しい外見の、青色の
髪のカリキュア。キュアビューティに変身したれいか
だ。

『五つの光が導く未来！ 輝け！ スマイル・プリキ
ュア!!』

そして五人が変身し終えると、改めて全員で揃った
決めポーズを決めるのだった。

「プリキュア？ 星空さんたちが……？」

人獣が語っていた意味不明な存在。その正体がまさ
か、星空さんたちクラスメイト五人だっただなんて。
ほむらは驚きを隠せず、目を見開きながらハッピーた
ちを見つめる。

「チッ！ プリキュア共も現れやがったか！」

こうなつたらまとめて片付けてやると、ハイパーア
カンベエと合体したウルフルンは、攻撃を開始する。

「星空さん。あなたたちプリキュアがどういった存在
なのか、すごく興味があるわ」

「ほむらちゃん。わたしもほむらちゃんのが気に
なる」

「でも今は……」

「アカンベエを倒すのが先！」

話を聞くのは目の前の敵を倒してからだと、ほむら
とハッピーたちは揃って散開する。

「ハイパーアカンベエ！」

アカンベエはサニーに狙いを定め、突進する。

「わっ!? なんやコイツ、めっちゃ速いねん!!」

寸でのところでかわしたサニーだったが、今までの
アカンベエにはない素早さだと、冷や汗をかく。

「今回の車と融合したアカンベエ。スピードはかな
りのものと見て良さそうですね」

時速百キロくらいなら何とか対処できるかもしれない
いが、それ以上出されたら果たして回避できるだろう
かと、ビューティは警戒を強める。

「スピード勝負なら、あたしに任せて！」

風の力を操る自分なら負けることはない、マーチ
は率先して攻撃を加えようとする。

「はああっ!!」

風の力によりスピードを得たマーチのキックが炸裂する。

「ハイパーアカンベェ!!」

「ええっ!?!」

だが、アカンベェはマーチをも上回るスピードで回避した。

「ハイパーアカンベェ!!」

そして、背後からマーチにパンチを食らわせる。

「きゃああっ!!」

時速百キロ超のパンチの直撃を受け、マーチは思いつ切り吹っ飛ばされる。

「マーチ!?!」

スピードに長けたマーチの攻撃が通じないどころか返り討ちに遭うだなんてと、ハッピーは顔を曇らせる。「ウルッフフ! いいぞ、ハイパーアカンベェ。そのままプリキュア共を吹っ飛ばしてやれ!!」

ウルフルンは上機嫌な高笑いをし、他のプリキュアたちに攻撃を向ける。

「うっ、うわっ!?! 避けられないー!!」

動揺しまくっていたハッピーは足がすくんで、アカンベェの突進を受けそうになった。

「危ない、ハッピー!!」

そんなハッピーを、サニーが抱きかかえて回避した。

「あっ、ありがとう、サニー」

「どういたしましたや。にしても、あんな速い奴、どうやって倒せばいいんや?」

圧倒的なスピードによる回避力と攻撃力。攻撃が当たらず防戦一方になる可能性が高く、簡単には突破口が開けそうにないと、サニーは顔を歪める。

「ウルッフフ! その調子で、今度はあの魔法少女とかという奴だ!!」

今回のアカンベェは、いつも以上にプリキュアとやり合っている。あとは力が未知数な魔法少女さえ倒せば勝利は確定だと、ウルフルンはほむらへと矛先を変える。

「ハイパーアカンベェ!!」

「ほむらちゃん、危ない!!」

ほむらの目前にアカンベエが迫り、ハッピーは声を荒げる。

「心配いらないわ」

しかしほむらは、涼しい顔でアカンベエの攻撃を回避する。

「何っ!? 馬鹿な!」

プリキユアたちが対処し切れなかった攻撃をこうもあっさりかわすとはと、ウルフルンは眼を開いて驚愕する。

「ええいつ! 続けて攻撃だ!!」

ウルフルンはやけになり、ほむらに攻撃を集中させる。

「無駄よ」

しかしほむらは、アカンベエの攻撃を、尽く避ける。

「すごい、ほむらちゃん……!」

わたしたちが手も足も出なかった相手と、互角以上に戦っている。これが魔法少女の力なんだってと、ハッピーは目を輝かせる。

「この動きはまさか、クロックアップ!」

ほむらの攻撃の特性を理解したピースは、やや興奮気味な声で語る。

「クロックアップ? 何やそれ?」

「仮面ライダーカブトがキャストオフ後に使う、自分の周囲の時間を加速させて、相手より速く動ける技だよ!!」

ようはほむらちゃん自体が速く動いているわけじゃなく、時間の流れが違うんだよ。そうピースは、自分の憧れのスーパーヒーローを髣髴とさせる技を使うほむらの行動に、鼻息を吹かしながらサニーに解説する。

「何やよう分からんが、ほむらの魔法は、時間に関するもんちゅーことやな」

ピースの説明は理解不能だが、魔法で時間を操作しているんだなど、サニーは納得する。

「あっ! 何か取り出そうとしてる」

ほむらが左手に装備した盾に手を伸ばしたのを見たハッピーは、いったいどんなマジカルな武器を繰り出すのだと、期待に胸を膨らませる。

「食らいなさい!」

ほむらは盾から八九式五・五六ミリ小銃を取り出し、アカンベエを機銃掃射する。

「えっ、ええー!？」

明らかに魔法とは異なる攻撃をしたことに、ハッピーは仰天する。

「まあ。最近の魔法は、随分とハイテクなですね」

「どう見てもアレ、魔法やない！ 現代兵器やろが!! 魔法少女やなくて、コマンドーや!!」

両手を口元で広げながら天然ボケをかますビューティに、サニーは激しくツッコむ。

「大丈夫だよ！ 世の中にはエスパァーがサブマシンガン乱射しながら、かくばくだん使ったりするゲームがあるもん!!」

往年のRPGを例に出し、ピースはファンタジー世界に現代兵器を出すのは全然OKだよと力説する。

「あと最近だと、ハッピーに声がそっくりなウィッチが第二次世界大戦当時の兵器を使って戦う、パンツじやないから恥ずかしくないもんなアニメがあるし」

「もうええ、もうええわ、ピース」

ピースの暴走が止まらなくなりそうなので、サニーは苦笑しながら制止する。

「へっ！ そんなちよこまかした攻撃は通じねえんだよ!」

「そんなんっ!？」

しかし、アカンベエには傷一つ与えられず、ほむらは驚く。

「それなら、これはどう?」

機銃の弾が通じないならと、今度は時間を止め、どこからともなく持ち出したタンクローリーをぶつける。

「あっ、あれっ!？ いつの間にかアカンベエが」

爆発炎上していると、ハッピーは驚嘆する。

「まっ、待てやー! いつ、今の攻撃はなんなのや!？」

「何って、危険物タンクローリー第四類よ」

「どっからあんなん持ち出したんや！ その盾は四次元ポケットかいな!？」

それ以前に最早現代兵器でさえないと、サニーは涼しい顔をするほむらにツッコまずにはいられなかった。

「原作版じゃなくて、敢えてOVA版で攻めるだなん

て。シブイねエ……まったくおたくシブイぜ」

ほむらちゃんの能力はクロックアップじゃなくて、
世界なんだね。そうピースは、ほむらの能力が加速で
はなく時間停止であることを理解し、右手に顎を乗せ
ながら、まるで批評家のように感心する。

「ウルッフフ？　なんだなんだあ、随分弱っつい炎だ
ぜ」

だが、ウルフルンはサニーの攻撃に比べたらマツチ
の火ほどの熱さしか感じないと、涼しい顔をする。

(考えたくないけど……)

恐らくアカンベエという存在は、通常火器ではダメ
ージを与えられない可能性が高い。

そうになると、魔法を用いた攻撃手段を持たない自分
では対処のしようがないと、ほむらは焦燥する。

(ほむらちゃんが苦戦してる。助けなきゃ！)

攻撃を避けることができても、自分の攻撃が通じな
きゃ倒せない。だったらわたしたちプリキュアが何と
かしなきゃって、ハッピーは意気込む。

「みんな、ほむらちゃんを助けるよ！」

ハッピーはみんなを鼓舞して、ほむらの救援に向か
う。

「ウルッフフ。飛んで火にいる夏の虫だぜ！」

プリキュアから進んだ的になるうとは好都合だと、
ウルフルン是不敵な笑みを浮かべながら突進しようと
する。

「させません！　プリキュア！　ビューティ・ブリザ
ード！！」

そんな時だった。ビューティがアカンベエの足元に
向け、ビューティ・ブリザードを放った。

「アッ、アカンベエッ！」

ノーマルタイヤのアカンベエでは凍結した路面に対
処できず、クルクルとスリッパしてしまう。

「今や！　プリキュア！　サニー・ファイヤー！！」

バランスを崩した今がチャンスだと、サニーは火球
をアカンベエに向けてアタックする。

「あたしも行くよ！　プリキュア！　マーチ・シュー
ト！！」

サニーの攻撃に乗じ、マーチは風の力を凝縮したポ

ールをシュートする。

「グウウッ！ まだだ！ まだっ!!」

サニーとマーチの攻撃によりダメージは負ったが、まだまだ戦えるとウルフルンはアカンベエを立ち上げらせ、懲りずに突進を行う。

「クッ！ 動きを封じなきゃ、どうしようもあらへんで！」

さっきは運よくダメージを与えられたけど、次も上手くいくとは限らない。相手の動きを封じるのが最優先だと、サニーは指摘する。

「わたしの雷の力なら、電気系統をショートさせて行動不能にできるかもしれないけど」

「ただそれは、攻撃が当たるのが前提。一瞬でも相手の動きを封じられたらなんと、ピースは頭を悩ませる。」

「そういうことなら、任せてもらえるかしら？」

ダメージを与えられなくても目くらまし程度なら可能だと、ほむらは盾より閃光手榴弾を取り出し、アカンベエに投げ付ける。

「ぐわっ！ 目が、目があゝ!!」

眩い光に、ウルフルンは目を両手で塞ぎながら苦しむ。

「よーし！ これならっ!! プリキュア！ わああっ!? ピイイス・サンダアアアッ!!」

ほむらが作ってくれた隙を有効に使おうと、ピースは涙目でピース・サンダーを放つ。

「ぐうっ！ かつ、身体が動かんっ!!」

ピースの目論見通りアカンベエは計器類がショートし、行動不能に陥った。

「よーし、みんな！ 今だよ!!」

この勢いでトドメを指すよと、ハッピーたちはプリンセスキャンダルを取り出す。

『ベガサスよ、わたしたちに力を!』

そしてプリンセスキャンダルにプリンセスキュアデコルを装着し、天空に重ね合いながら変身を始める。

「プリンセスハッピー!」

「プリンセスサニー!」

「プリンセスピース!」

「プリンセスマーチ!」

「プリンセスビューティ！」

五人は髪型がより際立ち、美しい衣装を纏った姿へと変身する。

『プリキュア・プリンセスフォーム！』

そして五人が揃って、掛け声と共にポーズを決める。

「開け！ ロイヤルクロック！！」

変身を完了して間もなく、ハッピーがロイヤルクロックに、ロイヤルレインボーキュアデコルを装着する。

「みんなの力を一つにするクルー！」

続けてキュンデイが両手でロイヤルクロックのボタンを押す。すると、ロイヤルクロックよりフェニックスが具現化する。

「届け！ 希望の光！」

ハッピーがベガサスを纏い、そう叫ぶ。

『はばたけ！ 未来へ！』

他の四人も同様に纏い、一斉に台詞を放つ。

『プリキュア！ ロイヤルレインボー……バースト！！』

五人が一斉にプリンセスキャンダルを掲げると、フ

エニックスより光線が放たれ、アカンベエに降り注がれる。

「アッ、アカンベエ……」

その眩い光の炎にアカンベエは包まれる。

『輝け！ ハッピースマイル！！』

プリンセスキャンダルの炎を息で吹き消しながら決めた台詞を放つと、プリキュアたちの後方で光が爆発し、アカンベエは完全に浄化される。

「新しいデコルが集まったクルー！」

アカンベエが浄化された後にはキュアデコルが残り、キュンデイが拾ってデコルデコルに収めるのだった。

「倒した！ いいえ」

プリキュアたちはアカンベエを消滅させたというより、光の力で浄化したように思えた。

その力を目の当たりにして、ほむらは思った。この希望の光に満ちた力は、まるでまどかかのようにだと。

「チイツ！ 厄介な奴が現れたぜ」

これからはプリキュアに加え魔法少女の相手もしくてはならないのかと、ウルフルンは息を切らしなが

ら撤退する。

「終わったわね」

ほむらはプリキュアたちと同タイミミングで変身を解くと、真つ先にみゆきたちに近付く。

「話してもらおうかしら？ プリキュアとは何なのか、何故あなたたちが魔法少女のことを知っているのか？」

開口一番、ほむらは疑問に思っていることを次々と質問する。

「えっ、ええっとお。話せば長くなるんだけど……」

まどかはあたふたしながら、自分たちがプリキュアになった経緯を語る。そして、魔法少女の森で出会ったさやかと、ポップから聞いた魔法少女の物語を語る。

「そう。美樹さやかはメルヘンランドという所で暮らしているのね」

まどかが救った魔法少女たちが平穏に暮らしていると聞き、ほむらはホッと胸を撫で下ろす。彼女等が第二の人生を歩んでいると言うのなら、まどかもきっとこの宇宙のどこかで喜んでくれているだろうって。

「ほむらちゃん、さやかちゃんのこと知ってるの？」

「ええ。彼女とは何度か一緒に戦ったわ」

「じゃあさ。まどかちゃんのことも知ってる？」

「えっ？」

まどかの名がみゆきの口から出た瞬間、ほむらの表情が変わった。

「星空さん！ まどかつて、鹿目まどかのことよね！ 同名の別人じゃないわよね！！」

ほむらはみゆきの肩を掴み、落ち着きのない声で問い詰める。

「いつ、痛いよ！ ほむらちゃん」

「あっ。ごめんなさい」

つい力が入ってしまったことを謝り、ほむらはみゆきの肩から手を放す。

「改めて聞くわ。あなたの言うまどかは、鹿目まどかで間違いないのよね？」

「うっ、うん。ポップから聞いた話だと、鹿目まどかちゃんの間違いないよ」

「そう。何故あなたたちがまどかの名前を？」

まどかの存在は、この宇宙から完全に消え去ったはず。あのバママでさえ忘れてしまったまどかの名を、どうして知っているのだと。

「それはね。メルヘンランドにまどかちゃんの記録が残っているっていう話だった」

「何ですって!？」

質問を続けるほむらに対して、メルヘンランドは異空間だから、地上では消えてしまったまどかちゃんの記録も残されているって、みゆきは又聞きした情報を語る。

「星空さん、あなたにお願いがあるわ」

「いきなり何、ほむらちゃん？」

「私を、メルヘンランドに連れてって!」

「えっ、ええー!？」

あまりに突拍子のないお願いに、みゆきは声を張りあげて驚く。

「お願い! まどかのことが書かれた記録を、私に見させて!!」

「ほむらちゃん……。ほむらちゃんにとって、まどか

ちゃんとはとっても大切な人なんだね」

学校では無感情だったほむらちゃんが、こんなに感情的になっている。冷静さを失うまでにまどかちゃんのことを想ってるんだなって、みゆきは優しい声で囁き掛ける。

「ええ、ええ、そうよ! まどかは私に取ってたった一人の、掛け替えのない大切な友達! 私は彼女を救うため魔法少女になって、数多の時間を巡ったのよ」

ほむらは語る。自分が魔法少女なった理由を。そして、まどかと交わした約束を果たすため、何度も何度も同じ時間を繰り返したことを。

「そっかあ。話してくれてありがとう、ほむらちゃん」
話を聞き終え、みゆきはこうしてほむらが自分と関わらないようにしていたのかを理解した。

あの時は自分の気持ちが伝わらなくて、ひたすら悲しかった。

でも、ほむらちゃんにはほむらちゃんの理由があつたんだねと、みゆきは今までのことを笑顔一つで水に流した。

「ほむらちゃんの気持ちはよく分かったよ。わたしはほむらちゃんをメルヘンランドに連れて行きたい」

でも、魔法少女とはいえプリキュアに関係のない人間を連れてつてもいいものだろうか、みゆきは頭を悩ます。

（是非連れて来てください、みゆきさん）

そんな時だった。突然ロイヤルクロックから、ロイヤルクイーンの声が響き渡った。

「ロイヤルクイーン様！」

（私も一度、ほむらさんにお会いしたいのです。お願いできますか？）

「うん！ ロイヤルクイーン様がいいって言うなら」

断る理由はないと、みゆきは頷く。

（ありがとうございます。それでは、再びメルヘンランドでお会いしましょう）

そう言い残し、ロイヤルクイーンの声は聞こえなくなった。

「ロイヤルクイーン様の許可も出だし、早速行こつ、ほむらちゃん」

みゆきはほむらの手を取り、共にメルヘンランドに行こうとする。

「ええ。ありがとうございます、星空さん」

ほむらはみゆきの手を掴み、微笑する。こうしてほむらはロイヤルクイーンに招かれ、メルヘンランドに赴くことになったのだった。

「おんやあ？ ウルフルンさんが苦戦しているようで、様子を見に来てみれば」

事の一部分始終を上空で静観していた、道化師姿の男。バッドエンド王国の幹部、ジョーカーだ。

「気になりますねえ。魔法少女の存在。そして……」

闇の黒い絵の具を跳ね除けるほどの不幸が。それが何であるかが分かれば、今以上にバッドエナジーを回収できるのではないかと、ジョーカーは不敵な笑みを浮かべる。

「もつともつと、魔法少女のことを知りたいく〜！」

「そういう君こそ、何者だい？」

狂言者のように台詞を吐くジョーカーの頭に、感情の籠ってない声が語り掛ける。

「んん〜?」

声の方向に目を向けると、そこには全身が白くて、赤い目に特徴的な長い耳を持った生物が浮遊していた。

「何者です、あなた?」

「僕の名前はキュウベえ。魔法少女の契約者だ」

「キュウベえ?」

どこかしらメルヘンランドの住人をイメージさせる外見に、ジョーカーは首を捻る。

「まあ、いいでしょう。私はバッドエンド王国のジョーカーと申します。以後お見知りおきを」

相手が名乗ったのならこちらも素性を明かすのが礼儀だと、ジョーカーは客人を招き入れるウェイターのようなお辞儀で自己紹介をする。

「バッドエンド王国のジョーカーか。それにしても、晝美ほむらの動向が気になって、後を追って来てみれば。驚いたよ。まさか僕たち以外にも、感情をエネルギーに変換する技術を持った勢力が存在するとはね」

「ほう? ということは、あなた方も」

「そうだよ。君等が収集しているバッドエナジーは、僕たちにとっても必要不可欠なものだ」

（成程。てっきりプリキュアと同勢力だと思っていたけどが……）

プリキュアが自分たちの行いを妨害する勢力であるのに対し、キュウベえが契約した魔法少女は、同じ資源を狙う同業者的存在というわけですかと、ジョーカーは頷く。

「これで分かったよ。最近魔獣の姿をさっぱり見かけなくなっと思ったたら。君等が人々からバッドエナジーを招集することで、発生を抑えていたんだね」

「魔獣と言うのが何かは分かりませんが、発生しないならば、あなたたちには好都合なんじゃないでしょうかね?」

私たちのお蔭で余計な手間が省けているのではと、ジョーカーは嘲笑するような声で呟く。

「人類にとっては何。だけど、感情エネルギーを収集することを目的とする僕たちインキュベーターにとつ

ては、極めて不都合な事案だよ」

(インキュベーター。何となくですが、分かっってきたねえ)

どうやらインキュベーターは、バッドエナジーを集めるために魔法少女を利用してはいる勢力らしいと、ジョーカーはキュウベえ側の関係性を推察する。

「率直に言うよ。今すぐバッドエナジーを回収するのをやめて欲しい」

「ほう？」

「君たちには君たちの都合があるかもしれないけど、

僕等がやっていることは、宇宙全体にとって必要不可欠な行為だ」

だから、たかだか一勢力に過ぎないバッドエンド王国にバッドエナジーを独占させるわけにはいかない、キュウベえは中止を呼び掛ける。

「残念ながら、その話は聞かせんねえ」

魔法少女のことには興味が尽きない。しかし、キュウベえから情報を引き出そうと僅かでも譲歩すれば、あちらはバッドエナジーの譲渡を求めて来るだろう。

最優先事項は、ピエロ様の復活。それを邪魔する者は全て敵だと、ジョーカーはキュウベえに向かいトランプを投げ放つ。

「！」

ジョーカーの攻撃により、キュウベえは肢体をバラバラに切り裂かれた。

「おやまあ？ 牽制のつもりが、何と呆気ない」

口で偉そうなことを言っていた割には、随分と脆い生き物ですねえと、ジョーカーは空中に飛散したキュウベえの亡骸を鼻で笑う。

「やれやれ。いきなり攻撃をするとは、乱暴じゃないか」

「おや？」

しかし、間もなく新たなキュウベえが現れ、ジョーカーは軽く驚く。

「まさか代わりがいらつしやるとは。面白い生き物ですねえ」

この様子だと、キュウベえにはいくら攻撃しても無駄だろうと、ジョーカーは溜息を吐く。

「なるべく穏便に済ませたかったけど、交渉は決裂みたいだね。今日は大人しく去るとするよ」

話し合いが無理なら長居は無用だと、キュウベえはジョーカーの前から立ち去ろうとする。

「覚悟しておくことだね。いずれ君たちを倒しに、他の魔法少女たちがこの街を訪れるだろう」

キュウベえはバッドエンド王国に遠回しな宣戦布告を行いながら、姿を消すのだった。

「ええ。楽しみにしてますよお」

何やら面白いことになってきましたねと、ジョーカーは今後の動向を楽しむように不気味な笑顔を浮かべながら、バッドエンド王国へと帰って行くのだった。

第二章・メルヘンランドの秘密

「学校？」

メルヘンランドに連れて行くと言ったみゆきに招かれたのは、学校の図書室だった。ここから一体どうやってメルヘンランドに赴くのだろうと、ほむらは首を傾げる。

「見ててね、ほむらちゃん」

みゆきは徐に本棚の本を動かす。すると、本が光り出し、その動作を何回か繰り返すと、突然本棚が光り始めた。

「ここは？」

光が収束すると、ほむらは見たこともないメルヘンチックな世界に移動したことに気付いた。

「ここがメルヘンランドだよ、ほむらちゃん」

「そう。ここが」

どんな場所かと身構えていたけど、随分と平穏な世界ねと、ほむらは肩の力を抜く。

「この先にあるのかしら？」

みゆきに案内されたのは鬱蒼とした森で、こんなところにもどかに関する記述がなされた書物があるのかと、ほむらは疑問を投げ掛ける。

「うん。ほむらちゃんには会わせたい人がいるから」
だからちよつと寄り道するよと、みゆきはほむらを魔法少女の森へと案内する。

「あーっ！ 転校生じゃん！！」

魔法少女の森を訪れると、さやかがみゆきたちを出迎えてくれた。

「美樹さやか。星空さんの言っていたことは、本当だったのね」

半信半疑だったけど、こうしてまた会えるとはねと、ほむらは安堵の表情を浮かべる。

「うん。まどかに導かれて、ここに来たんだよ」

「そう。あなたもまどかのことを覚えているのね」

「当然！」

これでもまどかと友達だった期間は転校生より長いんだからねと、さやかはウインクする。

「じゃあ、次こそまどかちゃんの記録が記されている本がある場所に行くねー」

自分も実際に読んだことはないから、どういった本なのかすごく楽しみだよと、みゆきはほむらの手を引っ張りながら目的地へと招く。

「お待ちしていたでござる」

みゆきが案内したのは、城内の書庫だった。

「ロイヤルクイーン様から話は聞いているでござる」

ポップはまだかや魔法少女のことが書かれた本が収められている本棚の前に、ほむらを案内する。

「これが、まだか殿に関する事柄が記述されている本でござる」

ポップは該当する本を取り出し、丁寧にほむらへと手渡す。

「これにまだかのことが……」

ほむらは手を震わせながら、恐る恐るページをめくる。

「あっ……」

するとそこには、確かにまだかのことが書かれてい

た。最初の時間軸、既にキュウベえと契約して自分を助けに来た時のことが、しっかりと刻まれていた。

「——！！」

ほむらは狂ったようにページをめくる。すると、自分が巡り巡った時間軸全てのまだかに関する事柄が、余すところなく記録されていた。

「本当だ、本当にまだかのことが……」

「ほむらちゃん？」

突然ほむらが身体を震わせながら本を優しく抱き締め始め、みゆきは声を掛ける。

「良かった。もうどこにも、誰の心の中にもまだかのこととは残ってないと思ってた……。それが、それがちゃんと残されていた……。まだかのしてきたこと、願ったこと、全部、全部……」

気が付けば、ほむらは嗚咽交じりの涙を流していた。

「良かった、本当に良かった……。まだか、まだかあ……」

「ほむらちゃん。そこまでまだかちゃんのことを想ってたんだね……」

ほむらちゃんと出会って、まどかちゃんのことを教えられて本当に良かったって、みゆきももらい泣きする。

「ええ……。再び私をまどかと引き合わせてくれて、本当にありがとう、星空さん……」

ほむらは嬉し涙を浮かべた満面の笑みで、みゆきに心からの感謝の言葉を送る。

「やったー！ ほむらちゃん！」

すると、突然みゆきは目をウルウルとさせながらほむらへと抱き付く。

「えっ？ 星空さん？」

突然の抱擁に、ほむらはキョトンとする。

「やっど、やっど笑顔になってくれたね、ほむらちゃん！」

ほむらちゃんが転校して来た時から、全然笑わらないことが気掛かりだった。だから、絶対にほむらちゃんを笑顔にしてみせるんだって、ずっとずっと思ってた。

みゆきはほむらが笑顔になってくれたのが心から嬉

しくて、抱き締めずにはいられなかった。

「ほむらちゃんもわたしも笑顔で、ウルトラハッピー！！」

みゆきは嬉しさのあまり、ほむらの頬を自分の頬でスリスリする。

「くすぐったいわ、星空さん」

そうは言うほむらだったが、全然嫌そうではなく、ちよっと恥ずかしがって頬を赤く染めていた。

「みゆきでいいよ、ほむらちゃん！」

わたしとほむらちゃんは、もう友達。だから苗字じゃなくて名前で呼んでって、みゆきはほむらの耳元で囁く。

「ええ、分かったわ。本当にありがとう、みゆき」

ほむらもまた微笑しながら、みゆきの耳元で名前を囁くのだった。

「よっ！ お似合いやで、お二人さん！」

事の一部始終を見ていたあかねは、からかうように二人に声を掛ける。新たな友情が芽生えたことに、やよい、なお、れいかの三人も、笑顔と拍手を送った。

「もお、からかわないでよ、あかねちゃん！ ほむらちゃんにはまだかちゃんがいるんだから、わたしじや釣り合わないよ〜」

みゆきは顔を真っ赤にしながらか、あかねに反論する。

「そうね。確かに私にとって、まだかは一番の友達。

でも……」

「でも？」

「みゆき。あなたとなら、まだかと同じくらいの友達になれそう」

だからこれからは一人の友達としてよろしくと、ほむらの方からみゆきを抱き締める。

「うん！ よろしくね、ほむらちゃん!!」

みゆきもまた、笑顔でほむらに抱き返す。こうして

みゆきは念願叶い、ほむらの笑顔を取り戻し、大切な友情の絆で結ばれたのだった。

(よろしいでしょうか、お二人とも)

二人の抱擁が終わったタイミングを見計らうように、

ロイヤルクイーンが声を掛けてきた。

「ええ。構わないわ」

(では、私の元へ)

ほむらはコクリと頷き、ポップに案内されてロイヤルクイーンの元へと赴いた。

(お久しぶりです、暁美ほむらさん。このような形で再びあなたと出会えたことを嬉しく思います)

開口一番、ロイヤルクイーンはテレパシーでほむらとの再会を喜んだ。

「どういうことかしら？」

私は初めて会うのだけれど、ほむらは独特の角度で首を傾げる。

(ええ。嘗ての私は魔女として幾度もあなたと戦い、そして絶望の果てに異なる時間軸を繰り返させてしまいました)

「！ まさかあなたは!!」

(ええ。嘗ての私は、あなたたちにワルブルギスの夜と呼ばれていた魔女です)

「！」

ロイヤルクイーンは語る。自分はまだあまりに強大な魔力を誇っていたが故に、まどかの力によって消滅せず、新たな生命体として転生したと。

（私は生まれ変わったその力を持って、メルヘンランドを創り出しました。そしてロイヤルクイーンとして君臨し、消え去るはずだった魔法少女たちのソウルジェムを救い、妖精として住まわせました）

そんなことでは今まで自分が犯した過ちの罪滅ぼしにはならないけど、少しでもまどかに協力したいと思っただが故の行爲だったと、ロイヤルクイーンは語る。

「いいえ、そんなことはないわ。あなたはあなたなりに、まどかを支えてくれた」

そして、この宇宙から抹消されたはずのまどかの記録を残してくれた。それだけでもう十分過ぎるくらいだと、ほむらは笑顔で語る。

（ありがとうございます。あなたにそう言われたことで、私の胸の楔も少しは取れました）

続けて、ロイヤルクイーンは語る。例え魔法少女が魔女にならない世界でも、人々の呪いが消え去ったわ

けではない。その綻びが魔獣と呼ばれる存在を作り出し、更には悪の皇帝ピエーロに支配されたバッドエンド王国を生み出してしまったと。

メルヘンランドとバッドエンド王国は、表裏一体。まどかの願いによって生まれたのがメルヘンランドなら、掬い切れなかった呪いによって生み出されたのがバッドエンド王国。

言わばバッドエンド王国は、まどかの願いの副作用だと、ロイヤルクイーンは悲しい声で語る。

「そう。あいつらはそういう存在なのね」

（曉美さん、こんなことをお頼みできる義理ではありませんが、あなたが構わないのであれば、プリキュアたちと共にバッドエンド王国と戦ってくれませんか？）

伝説の戦士であるプリキュアもまた、まどかの願いによって生み出された存在だと、ロイヤルクイーンは語る。

だけど、五人ともプリキュアになって一年にも満たず、まだまだ至らないところがある。だから熟練した

魔法少女である曉美さんにサポートして欲しいと、ロイヤルクイーンは懇願する。

「聞くまでもないわ。メルヘンランドもプリキュアも、まどかの願いによって生み出されたのなら、私には命を賭してでも守り抜く意味があるわ」

ほむらは誓いの証として自らのソウルジェムをペンダント状にして身に付けている左手を掲げ、ロイヤルクイーンの願いを受け入れた。

「わあい！ 一緒に戦ってくれるんだね、ほむらちゃん！」

みゆきはほむらと共闘できることが心から嬉しく、ほむらの手を取りながら、ブンブンと振り回す。

「ええ。戦いの方でもよろしくね、みゆき」

みゆきは私に笑顔を取り戻させてくれた。だから魔法少女としてではなく、一人の友達としてみゆきに協力したいと、ほむらは微笑する。

（ありがとうございます、曉美さん。そんなあなたに、私から細やかな贈り物があります）

そう語り、ロイヤルクイーンはほむらに弓を授ける。

「これはまさか、マジカルアロー!?」

形状は違うけど、まどかの使っていた弓を思い起こせると、ほむらは指摘する。

（そうです。この弓は嘗てまどかさんが使用していた弓を、あなた用に再現したものです）

この弓を使えば、まどかが使用していた魔法が使えはらず。アカンベエには通常火器は通じないから、この弓で戦って欲しいと、ロイヤルクイーンはお願いする。

「ありがとう。細やかだなんて、とんでもないわ。これ以上ない、最高の贈り物よ」

これでいつもまどかを感じて戦える。ほむらは授けられたマジカルアローをギュッと抱き締めながら、笑顔で感謝の言葉を送る。

こうしてほむらはロイヤルクイーンの頼みを聞き入れ、プリキュアと共闘することとなったのだった。

（今夜も、魔獣の反応はなしね）

夜分、マミは街のパトロールをしていた。ある日
境に魔獣が出現しなくなった原因を探り、万が一魔獣
が発生したら、即座に戦おうとして。

(佐倉さん、そっちはどうかしら?)

マミはテレパシーで、自分と同じ探索に回っている
杏子に定時連絡した。

(ダメだ。こっちも収穫ゼロだ)

(そう。これは喜ぶべきことなのかしら?)

魔獣が出現しないということは、それだけ人々の不
幸が取り除かれているからではないかと。

(んなわけねえだろ? 魔獣が現れなきや、あたした
ちのソウルジェムは浄化できねーんだ。あたしは、さ
やかみたいにはならねーぞ)

魔獣を倒せば、そのエネルギーはキューブとなる。

それはキューベえが回収するだけではなく、僅かばか
りだがソウルジェムの浄化もできる。

キューブを手でできなければ、ソウルジェムは浄化
できず、穢れが溜まっていくばかり。そして浄化し切
れなくなるほど溜まると、さやかのように円環の理に

導かれ、この世から消滅するだけだと。

(そうよね……)

マミは自らのソウルジェムをギュッと握り締め、複
雑な顔をする。世界が平穏であることに越したことは
ない。でも私は、自らの命を繋ぎ止めるため、魔法少
女になった。

だから、自分自身の生存に対する思いは、他の魔法
少女よりも強い。私だって消えるの嫌よと、マミは杏
子に本音を包み隠さず話す。

(どうやら、成果はないみたいだね)

そんな時、二人の頭にキュウベえが話し掛けてきた。
(んだよ、テメェッ! 今までもどこほつつき歩いてた
!!)

この数日まったく姿を見かけなかった。一体何をし
てたんだと、杏子はキュウベえを問い詰める。

(晝美ほむらのことが気になって、彼女の後を追って
たんだよ)

(晝美さんの?)

(そうだよ、マミ。そして突き止めたよ、魔獣が発生

しなくなった原因を)

(何ですって!?)

キュウベえは語る。魔獣が発生しなくなったのは、バッドエンド王国という謎の勢力が、魔獣を発生させる瘴気をバッドエナジーというエネルギーに変換して収集しているからだ。

(へっ！ じゃあそのバッドエンド王国って奴等が集めたモンを、奪っちゃまえばいいわけだな!!)

多少面倒臭そうだが、魔獣と戦うのと大して変わらなないと、杏子は意気込む。

(ところがね、話はそう簡単にはいきそうにもないよ)(どういうことかしら、キュウベえ?)

キュウベえはマミの質問に答えるように語る。バッドエナジーは、純粹な負のエネルギーの塊。自分たちが回収すれば有効活用できるだろうけど、ソウルジェムの浄化はできない可能性が高いと。

(んだよ！ じゃあ、そのバッドエンド王国って勢力そのものを潰さなきゃ、あたしたちは消滅するのを待つだけだつての!?)

(いや。ソウルジェムの浄化は、違うものでできる可能性がありそうだよ)

憤る杏子を宥めるようにキュウベえは話す。バッドエンド王国の者が作り出す、アカンベエ。それを倒すとキュアデコルというアクセサリーが残され、そのキュアデコルによってソウルジェムを浄化できる可能性がある。

(へっ！ だったらアカンベエつてのを倒して、キュアデコルを回収すりゃいいってわけだな!!)

二度手間になりそうだけど、キュウベえとあたしたちの利益がハッキリと分かれるなら、それはそれで悪い話じゃないと、杏子は勝気な笑みを浮かべる。

(ちよつと待って、キュウベえ。そのアカンベエというのは、誰が倒したのかしら?)

何者かが倒したところを目撃したから、キュアデコルの存在を知ったはず。そこがハッキリしないと、キュウベえの話は辻褄が合わないよ、マミは指摘する。

(それはね、プリキュアという存在だよ)

(プリキュア?)

キュウベえは語る。どういった存在かは分からないが、プリキュアという勢力はアカンベエを倒して、キュアデコルを回収していると。

(素敵ねえ。五人揃ってポーズを取りながら名乗りをあげるなんて)

それは自分の理想とする魔法少女の姿だと、ママは目を輝かせる。自分も憧れてはいたけど、仲間の魔法少女たちはあまり乗る気ではなく、実現には至ってない。

(感心してる場合じゃねーぞ、ママ。そいつ等がキュアデコルを集めちまったら、あたしたちのソウルジェムが浄化できねーんだぞ?)

(それはそうだけど)

キュウベえの話を聞く限りだとプリキュアは悪い存在ではなく、可能なら共闘したいとママは複雑な顔をする。

(へッ！ 訳分かんない奴と手を組むなんて、あたしはゴメンだね！)

利害が一致しない奴は全部まとめてぶっ潰すだけだ

と、杏子は槍を構えて闘志を露わにする。

(ともかく、一度プリキュアのいる街に行った方が良さそうね)

(同感だぜ。案内しな、キュウベえ)

(分かったよ)

そうしてママと杏子はキュウベえに導かれながら、バッドエナジーやキュアデコルを求め、七色ヶ丘市へと向かうのだった。